

縦横無尽 タテとヨコ色とかたちのフィールドワーク(20) : 南アメリカ便り

著者	吉本 忍
雑誌名	月刊染織
巻	290
ページ	58-60
発行年	2005-05-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/5203

縦横無尽のファイールドワーク

吉本 忍

南アメリカ便り



写真1 マプチェ人の杵機による機織り(チリ、ピヤリカ:2005年)



写真2 マプチェのタテ拵(チリ、ピヤリカ:2005年)



写真3 マプチェのタテ糸浮織(チリ、ピヤリカ:2005年)



写真4 伝統衣装をまとったマプチェの男女(チリ、テムコ:2005年)

1月半ばに日本を出発し、南アメリカに来ています。今回の旅は、民博(国立民族学博物館)のプロジェクトとして、チリ、ボリビア、ペルー、エクアドル、コロンビアにおける織機と織物などの標本資料収集と、ペルーとエクアドルにおける機織り技術の映像取材をおこなうことがおもな目的です。これまでは、チリ、ボリビア、ペルー、エクアドルで収集、そして、ペルーとエクアドルで映像取材をおこない、昨日、エクアドルから再びペルーの首都リマにある天野博物館(Museo Amano)で映像取材をおこない、その後にはペルー北部とコロンビアをまわって3月半ばに帰国の予定です。

日本を発つ前には、「染織α」の編集部に3月号(288号)の原稿を入手しておきましたが、4月号以降の原稿は執筆していませんでした。そのため4月号では連載には穴をあけてしまいました。今月号ではペルーのリマから、これまでの旅の経過を報告します。

マプチェの杵機

今回の旅では、はじめにチリの首都サンチアゴに飛び、そこから車でパン・アメリカン・ハイウエーを700km近く南下して、テムコという地方都市に直行しました。テムコに行ったのは、テムコとその周辺地域に住むチリの先住民、マプチェ人の織機と織物の収集をするためでした。チリはわたしにとって、はじめて訪問した国でしたが、現地で出会った人たちに快く受け容れていただいたおかげで、当初の予定通り8日間という短期間のチリ滞在にもかかわらず、とどこおりなく収集を終えることができました。そして、サンチアゴから発送した収集品もすでに民博に到着したようです。

マプチェ人のもとでは、屋内や屋外の壁に立てかけた杵機を使って、おもに羊毛を糸素材とした、タテ糸浮織、タテ拵、タテ拵などの織り技法によるタテ糸組織の織物が織られてきました。それらの織物の伝統的な用途は、おもにポンチョをはじめとする民族衣装やブランケットでしたが、今日では観光工芸として、カーペット、壁飾り、テーブルセンターといったあらたな用途の織物も織られるようになっていきます。これらのことは日本を出発する前にあらかじめ承知していましたが、現地入りして機織りの実際を目にしたさいに、杵機の綜絢が固定式であったことにはとても



写真5 ケチュア人の杵機による機織り（ボリビア、ハルカ：2005年）



写真6 ハルカのタテ糸浮織（ボリビア、ハルカ：2005年）



写真7 ケチュア人の杵機による機織り（ボリビア、タラブコ：2005年）



写真10 タラブコ地方のケチュア人の民族衣装（ボリビア、タラブコ：2005年）



写真8 タラブコの織り途中のタテ糸浮織（ボリビア、タラブコ：2005年）



写真9 手機による少女の織り習い（ボリビア、タラブコ：2005年）

ボリビアの杵機と手機

チエの杵機の綜統が固定式であったことは、新大陸におけるはじめての事例というあらたな発見となりました。

チリのテムコからサンチャゴに戻ったあと、ボリビアの首都ラパスを経由して南部のスクレに飛び、近郊のハルカとタラブコの両地域でケチュア人の織機と織物の収集をしました。ボリビアは1999年以来2度目の訪問で、

驚かされました。

綜統が固定式の織機は日本には存在しないもので、とくに綜統固定式の杵機について、わたしは、これまでシルクロードとその周縁地域をはじめとする、西シベリアからアラブ、そしてアフリカにかけての地域やマダガスカルが、その分布

地域であると、理解していました。したがって、マップ

スクレ周辺では前回はタラブコ地域で調査をしてきました。今回の収集は、その時に訪ねたことのあるハルカとタラブコの伝統的機織り技術の保護と育成を目的として設立された財団アスル (ASUR) が、スクレに開設している先住民芸術博物館 (Museo Arte de Indígena) の協力を得ておこなわれました。

ハルカとタラブコで使われている織機はともに杵機ですが、それらはチリのマブチエのばあいとは異なり、綜統は可動式です。そうした杵機では、おもにタテ糸浮織やタテ縞などの織り技法によってタテ畝組織の織物が織られています。ただし、ハルカとタラブコの織物は異なったもので、とくにタテ糸浮織技法によって織られ、女性用の衣装やコカ袋などとしてもちいられている織物は、ハルカでは羊毛とアルパカの糸を使って、動物をモチーフとした模様があらわされています。そして、タラブコでは羊毛と木綿の糸を使って、生活風景や家畜をはじめとする動物をモチーフとした模様があらわされています。

なお、タラブコで織機と織物を収集したさいには、それらについての調査とともに、機織りを実演してくれた母親の傍にいた11才の長女と8才の次女の織り習いの織機についても調査することができました。長女のばあいは、母親が使っているものよりも小型の杵機を使って、コカ袋とするための単純なタテ縞織物を織っていたのですが、次女はまだ杵機で機織りができるまでには至っておらず、コカ袋を肩にかけるための紐とするためのタテ糸浮織技法による細紐を、あや取りをしているかのような手さばきで織っていました。そうした次女の機織りに使われていた織機は、昨年7月号(280号)で紹介した手機のうち

写真13 サッチラ人の杵機による機織り
(エクアドル、サントドミンゴ・デ・ロ
ス・コロラドス：2005年)



写真11 異形の織物の映像取材 (ペルー、ピトゥ
マルカ：2005年)



写真12 コカ袋の縁に織り込まれる管状の織物
(ペルー、ピトゥマルカ：2005年)

に包括されるもので、織機の構成部品としては、タテ糸の先端部を保持するために地面に打ち込まれた1本の釘のほかに糸綜統と、開口保持具として機能する上糸と下糸のあいだに通した1本の糸があるのみで、タテ糸の張力は、ひとまとめにくくられたタテ糸の手元部分を左手のクスリ指にひっかけて引っ張ることによって付与されていました。ちなみに、トラブコではこの織り途中の手機も収集し、その代金は女の子にお小遣いとして直接手渡してきました。

アンデスの管状織物

ボリビアのハルカとトラブコの両地域で収集した織機や織物を、スクレで民博に発送したのちには、ラパスを経由してペルーのクスコに飛びました。クスコはインカ帝国の中心地として栄えた古い都で、標高3,400mあ

まりのアンデス高地に位置しています。わたしはここクスコで、民博の映像スタッフと合流し、近郊のチンチエーロとピトゥマルカでケチュア人の機織り技術の映像取材をおこないました。そのおもなテーマは、本誌の連載で一昨年(273号)から昨年の5月号(278号)にかけて紹介した異形の織物で、チンチエーロでは管状の織物と丸紐状の織物と楕円状の織物、そしてピトゥマルカでは杖状の織物と襷状の織物の製作工程をつぶさにビデオに収録しました。それらのうちで丸紐状の織物のみは、これまでの連載でアンデスでの事例を報告していませんでしたが、管状の織物の連載原稿を執筆している時点で、アンデスに丸紐状の織物があるからには管状の織物が織られていないはずはなく、昨年(277号)に掲載した写真2の襷状織物でつくられたコカ袋の縁に縫いつけられている紐は、その具体例であろうと考えていました。ただし、2002年にピトゥマルカでおこなった調査では、そのコカ袋の縁の織り作業は見て

いなかったことから、今回のピトゥマルカでの襷状の織物の製作工程の映像取材のさいには、同様の縁の作成を依頼しました。その結果、その縁があらかじめ考えていたように管状の織物であることがあきらかになりました。したがって、アンデスにはこれまでの連載で紹介してきた5種類の異形の織物のすべてが存在していることがあきらかとなったわけで、このことも今回の大きな収穫の1つとなりました。

サッチラの杵機

クスコをベースにした2週間の映像取材を終えたあとには、ペルーの首都リマを経由してエクアドルのキトに飛び、空港から車で4時間かけてサントドミンゴ・デ・ロス・コロラドスに直行し、サッチラ(コロラド)人の杵機による機織り技術の映像取材をおこないました。かれらは全身にボデイ・ペインティングをほどこし、男性は頭髪を刈り込んだオカッパ頭を植物の実でオレンジ色に染めた、独特のファッションで知られている民族です。かれらのあいだでは、木綿糸を使ってタテ縞織物が織られています。それらの織物の整経方式は輪状整経式で、織りあがった織物はおもに腰巻や肩掛けとしてもちいられてきました。ただし、今日ではかれらの機織りは、その多くが観光用のデモンストラーションとしておこなわれており、観光用、あるいは儀礼用にかれらが着用する腰巻や肩掛けなどの伝統的な衣装の多くも、高機で織られた市販の布が使われるようになっていきます。

2004年2月19日 ペルー、リマにて

(国立民族学博物館 民族文化研究部 教授)

よしもと・しのぶ